

多摩川の名脇役

湧水のせせらぎに沿う遊歩道

おたかのみち

17. お鷹の道 (東京都国分寺市東元町・西元町)

江戸時代に国分寺市内の村々が尾張徳川家の御鷹場[\*1]に指定されたことから「お鷹の道」と呼ばれるようになりました。現在では遊歩道として整備され、散策路として人々に親しまれています。また真姿の池湧水群には、飲料水を汲みに来る人々の姿が見受けられます。ちなみに『三鷹』や『鷹の台』等は、武蔵野一帯が御鷹場だったことから由来して付いた地名です。



(左から時計回りに)

1. お鷹の道の案内板
2. お鷹の道の入り口
3. 遊歩道脇の小川
4. 真姿の池に続く小川
5. 真姿の池の湧水 (写真-H20.7撮影)



## 御鷹場村農民への制約－・－・－・－・－

御鷹場に指定された村には様々な規則や禁止事項があり、そこに住む農民の生活も規制されていました。御鷹場の制約事項は鷹場ごとに異なりますが、尾張徳川家の御鷹場に指定された村では以下のような制約があったようです。

- ・多摩川で漁をしてはならない
- ・鷹狩りの時に通る道や橋を入念に手入れする
- ・犬猫はつないでおき、鳥獣は追わない
- ・田畑で火を焚かない、<sup>かかし</sup>案山子を立てない
- ・大声で人を呼ばない、手を叩かない、拍子木を叩かない、縄で地面を叩かない
- ・小屋や水車を造らない、家の新築をしない
- ・籠を背負わない、鉄砲を使わない

時代の移り変わりで内容は異なり、中には事前に届けを出せば許可される事項もあったようですが、制約の内容から察するに鷹場村に暮らす人々への負担はかなり大きかったことがうかがえます。

## ますがた 真姿の池の伝説－・－・－・－・－

清流に沿って「お鷹の道」を進んだ先に「真姿の池」がありますが、この池には次のような伝説が残っています。

### 真姿の池の伝説

時はさかのぼること平安の頃、玉造というところに一人の美しい女の人がありました。あまりに美しいので、小野小町にちなんで玉造小町と呼ばれていましたが、ある日突然不治の病にかかってしまいました。美しかった顔は見る見る醜くなり、玉造小町は悲しくて死にたい思いでした。

そんなある時、病氣平癒祈願のために国分寺を訪れ21日間参拝すると、一人の童子が現れて玉造小町に向かって手招きをしました。後について行くと小さな池がありました。その童子は「この池の水で身を清めるように」と言うのを消してしまいました。



真姿の池



真姿弁財天

童子に言われたとおり、玉造小町はこの池で体を洗いました。すると池に美しい虹がかかり、その虹の橋に弁財天が現れたのです。弁財天が玉造小町に向かって笑いかけたので、弁財天に近づこうとすると、虹とともに弁財天の姿は消えてしまいました。

玉造小町は池の端に膝まずき、ふと池の中を見ると池の波紋の中に美しい女の人が映っていました。弁財天が現れたと思ったのですが、別人のようでした。もう一度目を凝らして池の中をのぞき込むと、波紋が消えて水面に映っている女の人の姿がはっきりと見えました。それは紛れもなく玉造小町自身の姿だったのです。玉造小町は大喜びすると、国分寺薬師と弁財天に心からお礼を言って玉造に帰って行きました。玉造小町の本当の姿を映したことから、この池を「真姿の池」と呼ぶようになったそうです。

#### \*1 御鷹場（おたかば）

- ．．． 鷹狩りを行う場所のこと。飼い慣らした鷹を握り拳に止まらせ、乗馬で山野を駆け巡り、鷹を飛ばして野鳥や兎を捕獲した。鷹狩りは武道の鍛錬とレクリエーションを兼ねた一種のスポーツであった。江戸時代の間には鷹狩りが行われなかったのは、生類憐れみの令が施行されていた29年間のみ。鷹狩りには領内視察という政治的な意味もあった。

#### \*2 国分寺崖線（こくぶんじがいせん）

- ．．． 立川段丘と多摩川が浸蝕することにより出来た30kmにも及ぶ武蔵野段丘を隔てる崖線を国分寺崖線という。この崖線に沿って野川が流れている。この崖線は坂になっている場所が多いが、崖になっている場所では地層中の水路が集中し、多くの湧き水が出ている。国分寺から小金井・三鷹・調布・狛江を経て世田谷の等々力に至る。標高差は約10～15mほど。多摩川に面した地区では国分寺崖線のことを「ハケ」と呼ぶ。

